

主 題：自由人として生きる③

聖書箇所：ガラテヤ人への手紙 5章16-18節

私たちクリスチャンというのは救いによっていただいた新しい人生を歩み始めた者たちです。私たちはその新しい人生を生きるのですが、ただ日々の生活においてみずからの生活を吟味する必要があります。主からいただいた自由を正しく用いて生きているのかどうか——。言い方を変えれば正しい選択をして歩んでいるのかどうかです。主は私たちを永遠のさばきと私たちを捕らえていた罪の束縛から解放してくださり、自由を与えてくださいました。神の恵みというのは、私たちを罪から救い出して神の自由を与えてくださるすばらしい、すばらしい恵みです。我々は自由とされ、選択ができるのです。自由がなければ選択などできません。でも自由があるということは、我々には選択があるのです。みことばは我々にそのことを繰り返し教えてくれます。そしてみことばは、あなたは自分の自由を用いて正しい選択を繰り返ささいと教えるわけです。

◎ 私たちの間違った選択

そのことはわかっているのですが、悲しいことに私たちは自由とされていながら、日々の生活においても一度自分を束縛に追いやってしまう選択をひよっとしたら知らず知らずのうちにしている可能性があるのです。それも我々はもう見てきました。

① 「自分の力」に頼った信仰生活を送る

一番問題なのは、私たちが自分の力に頼って信仰生活を生きようとする事です。自分の力で神のご好意を得ることができると信じ込んでいるのです。頑張りさえすれば、神に喜ばれる生き方ができると。私たちが気づかなければいけないのは、私たちはどんなに頑張ったって、どんなに心を入れ替えたって、神が喜んでくださるような生き方を行えないということです。

② 「自分本位の価値観」に基づいた信仰生活を送る

また自分本位の価値観に基づいた信仰生活を送る人たちがいます。自分の中で“かくあるべし”ということを決めてしまうのです。神のご好意を得るためには〇〇のことをすべきであるとして、自分はその決めたことを一生懸命守り続けて行こうとするのです。そうすると、その人は自分はこういったことをしているから神に喜ばれている、そういうことをやっていないあの人たちは神に喜ばれていない、そのように一方的に彼らをさばいてしまう。こういった人たちの問題は、自分の中でこういう人が神に喜ばれるという人物像、信仰者像を作り上げていることです。そうして間違いなく自分は神に喜ばれていると信じ込んでいるのです。こういった人々というのは大変自尊心が高く、ほかの人々に対して批判的な態度をとっています。

③ 「自分本位の神学」に基づいた信仰生活を送る

私たちの問題点の三つ目は、自分本位の神学に基づいた信仰生活を送ることでした。聖書の教えでない、人間的な、誤った教えに従ってしまうことです。その例が無律法主義者のように、何をしても赦されるのだから自由に生きればよいという考えに基づいて生きてしまうことです。だから私たちは自分の歩みが本当に聖書に基づいているのか、この真理に基づいているのかを厳しく正しく吟味することが必要なのです。

☆ 神がクリスチャンに求められる生き方

さて私たちはこのガラテヤ5章から、自由人とされた私たち信仰者、クリスチャンたちがどのように生きて行くことを神が求めておられるのか、その具体的な例をこれまでに二つ見てきました。簡単に言えば神を愛することであり、そして隣人を愛すること、それらの実践でした。

1. 「神への愛から生み出される行い」：「愛によって働く信仰だけが大事」である。

私たちがみずからに問いかけなければならないことは、クリスチャンとしてしておられるすべてのこと、あなたの人生のすべてのことは神を愛するという正しい動機でもって行っているのかどうか、そのことを吟味しなさいということです。

2. 「隣人を愛するがゆえに奴隷として彼らに仕えること」：愛によって互いに仕え合いなさい

同時に13節の後半に「愛をもって互いに仕えなさい。」とありました。「仕え」るということは奴隷として仕えること、奴隷の務めを果たすことでした。我々はどっちが偉いという話をするのではなくて、互いにその隣人の奴隷となりなさい、奴隷として彼らに仕えていきなさいと教えていたわけです。しかも、これも愛という正しい動機を持って、愛を持って神を愛し、愛を持って隣人を愛しなさいと。神に仕えるように私たちは隣人にも仕えていきなさいとここでパウロは教えてくれました。でもこのパウロ

の教えというのは、新しい教えではなく、実はイエス様ご自身が命じておられたことの実践を命じたことに過ぎません。ヨハネ 13：34 でイエス様は私は「あなたがたに新しい戒めを与えましょう。」「戒め」つまり命令です。どんな命令かというと、「互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、……あなたがたも互いに愛し合いなさい。」と。「互いに愛し合」うということがイエス様によって命じられています。パウロがここで私たちに教えてくれたのは、まさにその実践です。そのように生きなさいと。

☆ クリスマンが正しく生きる必要性

パウロはこうして私たちに、クリスマンとしてどのように生きるべきなのかを教えてくれたわけですが、どうして私たちクリスマンは自由人として正しく生き続けていくことが重要なのでしょうか？正しく生きなさい、正しく歩みなさい、そのことが繰り返されているのですが、なぜその必要性があるかです。恐らく皆さんはすべてその答えをお持ちだと思います。なぜ私たちが神の前に救われた者として、自由人として正しく生き続けていくかということ、その生き方が私たちが生かされている目的である、神の栄光を現す生き方だからです。

◎ 神の栄光

1. 旧約の時代

皆さんに少し伝えたいことは、旧約の時代において神はどのようにご自身の栄光を現されたかです。さまざまな方法があります。例えばあのモーセたちの時代において、「主の栄光が雲の中に現われた。」とあります。確かにそういったことが起こりました。出エジプト 16：10 にそのように記されています。

また「主の栄光が幕屋に満ちた」と同じく出エジプト 40：34 に出てきます。神殿はまだ完成していませんでした。その時にあったこの幕屋に栄光が満ちたと。民数記 16：42 に「会見の天幕」が雲によっておおわれて、「主の栄光が現われた。」とあります。Ⅰ列王記 8：11 には「主の栄光が主の宮に満ちた」、Ⅱ歴代誌 5：14 にも「主の栄光が神の宮に満ちた」と書いてあります。神様はいろいろな方法でご自身の栄光を明らかに示された。Ⅱ歴代誌 7：1-3 を見ると「ソロモンが祈り終えると、火が天から下って来て、全焼のいけにえと、数々のいけにえとを焼き尽くした。そして、主の栄光がこの宮に満ちた。」と、ソロモンによって完成した宮が栄光に満ちたと。「祭司たちは主の宮にはいることができなかった。主の栄光が主の宮に満ちたからである。イスラエル人はみな、火が下り、主の栄光がこの宮の上に現われたのを見て、ひざをかがめて顔を地面の敷石につけ、伏し拝んで、『主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。』と主をほめたたえた。」と記されています。光景を思い描いてください。神殿が主の栄光に満たされ、人々はそれを見て大変恐れを抱いたわけですから。こうした旧約聖書の時代においてはさまざまな形で神の栄光が示され、人々はそれを見て正しい恐れを抱きました。

2. 新約の時代

新約聖書の時代に移ります。新約の時代にどのような方法で神が栄光を現されたかということ、こういうみことばを皆さんよくご存じだと思います。「私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。」と。最初の部分を飛ばしたのですが、どこの箇所かわかりますか？最初は「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。」と書いてあります。ヨハネ 1：14 です。だれのことかと言うと主イエス・キリストです。この方を通して神の栄光が現されたのです。マタイの福音書には、イエス様がオリーブ山でメッセージをされた時に「人の子が、その栄光を帯びて、」帰って来ると 24：30 と、25：31 に記されています。つまりイエス・キリストを通して神の栄光が明らかに示されたのです。そしてそのイエス・キリストが十字架で亡くなり、我々の身代わりとなって死んでくださり、そして昇天なさいました。

その後どうなったかと言うと、みことばは次のように教えます。「御霊はわたしの栄光を現わします。」と。ヨハネ 16：14 ですが、次に何が起こったかと言うと、栄光の主が天に凱旋された後、今度は聖霊なる神が送られているのです。そしてその聖霊なる神を通して栄光が現されている。そして、ペンテコステ以降教会が誕生しました。その教会——建物の話ではなく、イエス・キリストによって救われた者たちに対して、皆さんもよくご存じのⅠコリント 6：20 で、神は、「あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。」と言われました。また同じⅠコリント 10：31 では「こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現わすためにしなさい。」と言っておられます。

お気づきになりました？旧約の時代において神はさまざまな方法でご自身の栄光を現され、新約になってイエス様を通して栄光が現された。そして聖霊を通して栄光が現され、教会が誕生した後、教会である私たちを通して栄光が現されるのです。我々信仰者はこのことをしっかり覚えておかなければいけない。神はなぜあなたを救ったのか——。なぜ神様はあなたをこの地上に置いてくださったのか——。目的はあなたを使って、神ご自身の栄光を現すためにです。そのために私たちは救われ、そのために私たちはこの地上に置かれているのです。だから私たちがどうすれば神の栄光を現すことができるのかを

考えて生きるのは当然のことではありませんか？ですからみことばは私たちに繰り返し正しく歩んでいきなさいと言うのです。なぜそんなことを言うのか——。それが神の栄光を現す方法だからです。そういう生き方こそが神の栄光を現すのです。

☆ 神の栄光を現す生き方：神に従うこと

神は栄光を現す存在としてあなたを救ってくださり、あなたを生かしてくださっている。どうしたら、栄光を現すことができるかという、それは神に従うことです。神のみことばに従うことです。神のみことばに従うことです。神の命令を实践することです。みんな同じことでしょうか？神がしなさいと言うことを行うことです。そのことによって我々は栄光を現すのです。

例1：「主イエス」：主の人生がそのことを教えてくれる ヨハネ17：4

皆さんに質問ですが、主イエス・キリストは神の栄光を完全に現したのでしょうか？現さなかったのでしょうか？だれでもわかるようなばかげた質問です。主イエス・キリストの歩みを私たちが振り返る時に、イエス様は父なる神の栄光を完全に現された。なぜ彼が栄光を現すことができたのかというと、イエス様はヨハネ17：4で「あなたがわたしに行なわせるためにお与えになったわざを、わたしは成し遂げて、地上であなたの栄光を現しました。」と言われました。みことばにはちゃんと書いてあります。主イエス・キリストがどうして父なる神の栄光を現したのかというと、それは主イエス・キリストが父なる神のご計画に完全に従ったからです。神への従順が栄光を現したのです。この箇所を直訳すると、「私は地上であなたの栄光を現しました。あなたが私に行なわせるためにお与えになったわざを成し遂げることによって」と教えています。主イエス・キリストは父なる神のみことばに従順に従うことによって父なる神の栄光を現し続けていたのです。イエス様はあなたや私の模範でしょうか？主はこんなふうに進められた。

例2：初代教会 使徒2：46、47

また初代教会を思い出してください。初代教会は神様によって大いに用いられた。特に使徒2：46-47を見ると、その教会の様子が書かれています。「そして毎日、心をつにして宮に集まり、家でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、神を賛美し、すべての民に好意を持たれた。」と。彼らは「心をつにして宮に集まり、喜びと真心をもって食事を」していたと。彼らの心は喜びにあふれていたし、真心——彼らは混じり気のない、汚れのない、正しい聖い心を持って交わりを持っていた。だから神への賛美が彼らのうちから生まれてきたのです。つまり、ここに記されている初代教会のクリスチャンたちひとりひとりが心から神に感謝を捧げていた、心から神に賛美を捧げていた。それは彼らの心が喜びにあふれていたからです。ではなぜ彼らの心が喜びにあふれていたのか——。彼らは神の前を正しく生きていたからです。もう私たちは何回も見ていますけれども、私たちがいつも喜びを持って生きるためにはどうしたらいいのか——。簡単です、神の前に正しく生きることです。まさにこの人たちはそうしていたのです。

結論：

ということは、私たちもこのような歩みをなすことができるということです。ひょっとしたらある人はイエス様だからできたのだという言い訳をするかもしれない。でも初代教会にあって、そのように生きていたのです。それで神は彼らを祝ってくださって、毎日救われる人々を仲間に加えたと書いてあります。神が喜んでおられることをこういう方法で神は示してくださった。だから私たちはこの神の言われることを常に心に刻んでおかなければいけない。みことばに服従することが大切であると。そしてあなたも私も神のみことばに従って生きるなら、神のみことばに従うならば、神の命令を守って生きるならば、間違いなく栄光を現していくのです。もし私たちがこんなふうに進んでいるならば、「あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行ないを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」（マタイ5：16）、そういったことが起こるといえることです。あなたが置かれている環境がどういう環境かはわかりません。大変辛い環境にいるかもしれない。自由がある程度束縛されている環境にいるかもしれない。辛いな、こういう状況から逃れたいと思うような環境にいるかもしれない。でも、聖書を見る時に神はあなたをそこに置いてくださっている。それはなぜかという、神はあなたを使ってその環境の中で、その境遇の中でご自身の栄光を現そうとくださっているからです。我々が学ばなければいけないのはそのために生きていくということです。

だから私たちは「主よ、どうぞ私を使ってください。」と祈るのです。我々がよくする祈りは、「こういう環境から私を解放してください、こういう環境から私を逃れさせてください」というものです。でも信仰の勇者たちはそういう祈りをしていないのです。彼らは、「主よ、あなたに従い続けることを教えてください」と、彼らが求めたのは自分の勝手な自由ではなかった。彼らが願ったことは、どうしたら神の栄光を現すことができるかということです。そして神が主権者であるゆえに、その場その場に置いてくださっている。彼らはどんな時でも主がすべてをご存じであり、主がすべてを用いてくださ

ることを知っていたから、「主よ、どうぞこの環境で、この状況であなたの栄光を現すことができるように私を助け用いてください」と祈ったのです。我々はそういう歩みをする事ができるし、我々がそういう歩みをする事によって、私たちは間違いなく変えられていくのです。

我々はそのことを見ていくのですが、少なくとも私たちが覚えなければいけないのは、あなたには大変大きな責任があるということです。みんな神様のみことばに従って生きようとしている、失敗しながらもそうやって生きようとしている。私ぐらい好き勝手な歩みをして構わないのではないかと……。我々がみことばから教えられることは、一つの罪が教会の証を奪っていきました。だから私たちがしっかりと覚えなければいけないのは、自分のことではなくて神のことを優先しなければいけない。自分を喜ばせることよりも神を喜ばせることを優先しなければいけない。この後私たちが見ていくように、まさに私たち信仰者の葛藤はそこにあります。神を喜ばせたいという思いはあるけれども、そうでない思いも同時に私たちの心の中にはあるのです。だからひとりひとりが覚えなければいけないのは、自分がどのように生きるのか、正しく生きて神の栄光を現すのか、それと全く違う生き方をして神の栄光を汚して証を失うのか。どちらの選択をするかという**大変大きな責任が実はあなたにはあるのだ**ということを私たちは忘れてはいけません。罪を犯して神の栄光を現すことはできません。「人の怒りは、神の義を実現するものではありません。」（ヤコブ1：20）とヤコブが教えたように、神の栄光のためではなくて自分のために生きている人がいるならば、悲しいことはその人も、その人が集っている教会も神の栄光を現すことがないからです。

先ほどから神の栄光を現すことが私たちの生きる目的だと話してきました。そしてそれが可能なのだと言ってきました。パウロは「あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのこと」（コロサイ1：27）だと言いました。つまり我々信仰者が覚えなければいけないのは、どんな方があなたや私のうちに住んでおられるのかなのです。私たちが気づかなければいけないのは、先ほども見たように、信仰生活を生きるために必要なのは私たちの力ではないのです。というのは私たちの力は不完全だからです。我々に必要なのは、全能なる神の力です。そしてみことばが教えてくれるのは、その力ある神があなたのうちに内住しているということです。なぜその方に助けを求めないのかです。もっといえば、そのレッスンを学ぶためにいろいろなことを神様は私たちの生活にもたらしていると思いませんか？神を信頼していると思っていながら、実は神ではなくて自分の力を信頼したり、自分の知恵を信頼している。そういった自分たちの過ちを悟らせるために神はさまざまなことを使って、「ああ、自分は神に頼っているつもりだったけれども、そうではなかったな」ということに気づかされている。私たちのことを愛してくださっている神様は、我々の弱さを示してくださって、そして私たちに「私に従え、私を信頼しなさい」ということを教え続けてくださるのです。

☆ 勝利ある信仰生活の鍵 16節

さて、きょうのテキストを見ると、いよいよ自由人として生きる教えの核心に入ってきます。勝利ある信仰生活の鍵が実はここににあるのです。私たちはどんなふうに生きていけばいいのか、どんなふうに歩むことによって神への愛、隣人の愛というのを保ち続けることができるのか、どんな歩みをすれば神の前に正しいことが選択できるのか、そのように歩み続けることができるのか——そのすべての秘訣がここに記されています。

1. 罪との戦い

「私は言います」とパウロが強調して、声を大にしてこのメッセージを語ろうとしています。「御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。しかし、御霊によって導かれるなら、あなたがたは律法の下にはいません。」（16-18節）、ここに「御霊」ということばと「肉」ということばが繰り返されていることにお気づきになったと思います。この16-18節には「御霊」ということばが4回出ています。また25節までに新たに4回。このわずかな箇所にも8回も「御霊」ということばが出てきています。「肉」ということばは16-18節の間には3回、25節までには新たに2回、トータルで5回出ています。なぜこういうことばが記されたのか、それを見る前にまず意味を調べてみましょう。

この「御霊」とはどういう意味で「肉」とはどういう意味なのかです。「御霊」というのは聖霊のことです。救いにあずかったクリスチャンに可能となった新しい生き方、聖霊による生き方を意味しています。救われることによって私たちには聖霊によって生きていくという新しい生き方ができるようになった。そのことを意味しています。「肉」とは、これまで私たちが学んできたように、これはまさに罪の性質です。その「肉」の赴くままに生きてきたかつての生き方を表しています。「肉」には別の意味もあるのですが、特にここで使われているのは救われる前に私たちが生きてきたその生き方、神を全く無視して自分の快樂のままに生きてきた、そういう生き方を意味しています。これは明らかに「御霊」と「肉」、

この二つのことを対比しているのです。なぜなら「御霊」と「肉」は相反するものであり、互いに対立するものです。救われた者としての新しい生き方と救われる前の古い生き方、そういうふうにも言うこともできるし、神のみこころに沿った新しい生き方と神のみこころに逆らった生き方、このようにも言うことができます。パウロが言っているのは、罪の奴隷であった時、つまり自由がなかった時には罪に従うことしかできなかつた。でもその罪から救い出されたあなたには自由が与えられて、このどちらかを選択することが可能となったと教えています。可能となった者として、選択の自由がある者として、あなたはこれからも継続して正しい選択をし続けなさいと教えるわけです。恐らく信仰者の皆さんはその葛藤をいつも経験されているはずです。私は信仰を持てば罪から完全に解放されると思っていました。ところがそうではなかつたのです。これまでと同じ罪との葛藤を経験するわけです。そして繰り返し敗北を喫したです。というのは主イエス・キリストによって救われたけれども、私たちのこの罪の性質は栄光のからだをいただく時までなくならないということです。この地上に私たちがいる間は、この罪との戦いが続くということです。

復習のためにローマ7章を開いてください。ご存じのようにここにはパウロ自身の証しが記されているのですが、救われているパウロが自分のことを正直にここに記してくれています。ローマ7：17を見ると、「私のうちに住みついている罪」とあります。あのパウロが私のうちに罪が住みついていると言うのです。18節には私の「うちに善が住んでいない」と。何が住んでいるかということ、悪が住んでいるということです。21節には「私に悪が宿っている」とパウロは教えています。23節の「からだの中にある罪の律法」と言っています。25節には「肉では罪の律法に仕えている」と。こういった表現を使うことによって、罪の性質が私から完全に消え去っているわけではないということを明らかにしています。そしてローマ7：15を見てください。「私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっている」と。18節にも「私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。」、ローマ7：19節には「私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。」とパウロ自身の葛藤を見ることが出来ます。神に喜ばれることをしたいと思っていながらそうでないことをしている自分がいると。

2. 「御霊によって歩む」

我々はこういう生活を送っているはずですが。罪との戦いの中を生きています。しかも悲しいことに罪に対する敗北が毎日の生活で起こっています。そこでパウロは言うわけです。「御霊によって歩みなさい。」と。自分の弱さを知っていたパウロ、自分の信仰者としての生活における葛藤をだれよりもわかっていた彼が、そのような中であってどう生きたらいいのかを教えてください。それは「御霊によって歩む」ということです。「歩みなさい」というのは「生きる」ということです。パウロがここで言っているのは聖霊によって継続して生きていきなさいと。聖霊によって継続して暮らしていきなさいと。つまり私たちが新しく生まれ変わった者として、クリスチャンとして生きて行くために絶対欠かすことのできない存在、それが聖霊だと言っているのです。あなたの意思によって生きなさいとか、努力によって生きなさいとかそんなことは記していません。私たちがこの地上にいて正しく歩んでいくための秘訣、それを可能にしてくれるのは聖霊だと言うのです。その聖霊によって歩んでいきなさい、歩み続けていきなさいと。現在形です。

1) 「聖霊の働き」：

(1) 「義認における聖霊のみわざ」：救いにおける聖霊の働き

ヨハネ16：8、使徒11：18、ヨハネ6：44、エゼキエル36：25—27

というのは聖霊というのは大変な働きをする存在だからです。大変な働きをしてくださる神なのです。あなたが教会に来た時やあなたが初めてイエス様の福音を聞いた時、なかなか理解できませんでした。同じ日本語で語られていてもなかなか理解することができなかつた。何回聞いてもなかなか理解できなかつた。でもある時に理解したのです。ある時に私は本当に罪人です、私は本当にさばかれる存在です、私は本当に罪の赦しが、救いが必要ですと、そのことを心から悟った時があるでしょう？なぜかということ、聖霊があなたの心に働いたからです。イエス様はヨハネ16：8に「その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。」と書いてあります。つまりあなたがIQが高いからこの真理を悟ったのではないのです。あなたが何十回という回数を聞いたから悟ったのではないのです。聖霊なる神が働いてくださったから悟れたのです。そうみことばは我々に教えます。そしてあなたはそのことに気づいただけではない、そのことを悟っただけではない、あなたは心の中で私は間違っていた、神の前に私は悔い改めなければいけない。今までのように間違った生き方ではなくて正しく歩んで生きたい、そのような悔い改めの思いを持ったのはどうしてかということ、聖霊が働いたからです。

異邦人が救いへと導かれました。ユダヤ人たちにとっては驚きでした。そこで彼らはペテロに質問するわけです。そこでペテロはこんなふうに答えるのです。神様がなさったことです。異邦人を救ってく

れたのだと。その時の反応がおもしろいのです。それを聞いていた人々は今までの反論をやめるのです。沈黙して「『それでは、神は、いのちに至る悔い改めを異邦人にもお与えになったのだ。』と言って、神をほめたたえた。」（使徒11：18）と。神はあなたに悔い改めを与えてくれたのです。あなたが確かに神の前に罪を悔い改めたのだ。でもそれは実は神の働きだと使徒11：18が教えています。そうしてあなたは救いへと導かれるのです。あなたがイエス・キリストを信じるというその信仰告白においても、実は神がそのことをなしてくださった。ヨハネ6：44では「わたしを遣わした父が引き寄せられないかぎり、だれもわたしのところに来ることはできません。」、私たちの努力によって神の所に行くことは不可能だと。それはすべて神のみわざだと。お気づきになりました？あなたが神のことばを聞いて、その神の真理に気づくこと、自分の罪深さを悟り、自分には救いが必要であることを悟ったというのは神の働きであり、そのことがわかって私は神の前に罪を悔い改めたいという決心をしたのも実は神の働きであり、そして救ってくださるイエス・キリストを信じましょうという、イエス様を信じる信仰に至ったのも実はこれは神の働きだ、神の恵みなのです。こうして神は私たちを救ってくださった。そして、神によって救われた信仰というのは、その信仰が本物かどうかを信仰自体が明らかにして行きます。どういう意味かというと、神によって救われた人は必ず変化が生まれます。

なぜそう言えるかということ、預言者エゼキエルが私たちに教えてくれます。エゼキエル36：25-27に「わたしがきよい水をあなたがたの上に振りかけるそのとき、あなたがたはすべての汚れからきよめられる。わたしはすべての偶像の汚れからあなたがたをきよめ、あなたがたに新しい心を与え、」とあります。「新しい心」が与えられるのです。これが救いなのです。「あなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。わたしの霊をあなたがたのうちに授け、わたしのおきてに従って歩ませ、わたしの定めを守り行なわせる。」。神はただ「新しい心」を与えるだけではなく、「新しい心」を与えた人が神の命令に従っていくような新しい歩みを始めるようになると。それが神のなされる救いのみわざなのです。そうみことばが記しています。「新しい心」を与えてくださり、そして神のおきてに従って、神の命令に従って、教えに従って生きて行くように、私たちを変えてくださるのです。ですからただ自分が信じたと言って、ただ告白しているだけの話ではないのです。神が救ったら、神はその人を新しく造りかえて新しい歩みをする事ができる者へとしてくださった。ですからこうして我々の救いというものを見た時に、まさにこれは聖霊なる神様の働きであると。

（2）「聖化における聖霊のみわざ」：信仰生活における聖霊の働き

使徒8：29、10：19、11：12、16：7、19：21

でも聖霊の働きというのはそこで終わったのではないのです。信仰生活においても聖霊が働き続けてくれているのです。というのは「御霊によって歩みなさい。」というのは聖霊が救いだけでなく、救われた者を導いてくださることを言っているのです。だから聖霊によって歩めと言っているのです。聖霊は歩むべき道を示してくださり、私たちを守ってくださり、私たちを導いてくださる。聖霊がこのような働きをするのだから、聖霊によって生きていきなさいと。

簡単に復習ですけれども、皆さん覚えていると思います。ピリポという一人の伝道者が馬車に乗っているある人のところに出て行って、みことばを語るようにと導かれます。馬車に乗っていたのはエチオピアの宦官でした。でも一体だれがピリポに働いて彼の所に行きなさいと命じました？使徒8：29で「御霊がピリポに」と記されています。聖霊なる神の働きだったと。ペテロが幻を見ました。天から風呂敷が下りてきて、聖くない動物がその中にいて、それをほふって食べなさいと。その話があった時にイタリア隊の百人隊長であったコルネリオから三人の者たちが遣わされてくるのです。彼らが来ていると告げたのは聖霊です。「ペテロが幻について思い巡らしているとき、御霊が彼にこう言われた。「見なさい。三人の人があなたをたずねて来ています。」（使徒10：19）、そうやって聖霊がペテロに教えたと言うのです。ペテロが割礼のない者たちと食事をしていることを非難された時に、ペテロは証をします。「御霊は私に、ためらわずにその人たちといっしょに行くように、と言われました。」と。御霊が私に行きなさいと言った。これはすべて聖霊なる神様の働きを言っているのです。

第二次宣教旅行においてパウロはまたアンテオケから出て行くわけですが、その時に「ムシヤに面した所に来たとき、ピテニヤのほうに行こうとしたが、イエスの御霊がそれをお許しにならなかった。」とあります。彼はもっとガリラヤ、今のトルコにおいて伝道しようと思ったのですが、その道を神が閉ざされた。第三次宣教旅行においてもそうです。使徒19：21「これらのことが一段落すると、パウロは御霊の示しにより、マケドニヤとアカヤを通ったあとでエルサレムに行くことにした。」と。この新改訳聖書では御霊の示していることで聖霊と書いてありますけれども、パウロ自身の霊であったかもしれない。いずれにしろ神のみこころに従おうとしていたパウロを神はちゃんと導いてくださった。パウロだけではない。神様のみこころに従っていきたく願っている者たちを神はちゃんと導いてくださるのです。

2）「御霊によって歩む」 ルカ6：46

ですから「御霊によって歩」め、「御霊によって歩み」続けなさいということはこういうことです。あなたの信仰生活において、あなたの日々においてその瞬間瞬間を神の助けを仰ぎながら、「主よ、どうぞ私を助けてください」という祈りをもって歩み続けていきなさいと言うのです。ただその時に覚えなければいけないのは、「御霊によって歩」むというのは、自分の考えや自分の願い、自分の夢をそのままにして御霊とともに生きることではないということです。もし私たちが御霊に従うのだったら、私たちの考えや思いや夢を一切捨てることです。なぜなら御霊によって生きるということは我々信仰者に与えられたすばらしい祝福なのです。なぜかというと、神があなたをみこころに沿って導いてくれるのでしょうか？そんな生活ができるのは我々信仰者だけではないですか？生きた神があなたを愛して、その方があなたを導いてくれる。それを邪魔するのはあなた自身の考えなのです。あなた自身の思いなのです。あなた自身の夢なのです。計画なのです。ですから御霊に従って生き続けるためには、我々は自分という、邪魔する者を捨てないといけません。実際に私たちも多くの人たちを見る時に、彼らの信仰の歩みを妨げているのは結局自分なのです。「神様、これがみこころであることを願います」、そうやってなぜ自分の考える最善を優先しようとするのでしょうか。私たちの考えることなど間違いだらけです。失敗だらけです。完全なお方は神しかないのです。しかも我々はその方に導かれて生きることができるのです。ですからここで「御霊によって歩みなさい」と言われた時に、私たちは「主よ、あなたの栄光を現すために、あなたの前に正しい選択を続けるために、私はあなたの助けが必要です。どうか私を助けて、そしてあなたのみこころに従って生きていけるように私を導いてください」、そのように願いながら歩み続けることです。自分の考えではなくて主に従っていき、自分の計画ではなくて神の計画に従っていきうと。

よく考えてみると、我々がイエス様を信じる時にした決心はそういう決心ではなかったですか？我々がイエス様を自分の主として、この方を受け入れて、そしてこの方信じて従って行く決心をしました。これまでは自分の思いに従って生きてきた私たちが、これからはその間違った生き方をやめて、この神に従って生きていくのです。この方が私の主人なのです。私は奴隷なのですから。この方が言われるように生きていきます。そうやって私たちは、主を信じるという選択をしたのではなかったでしょうか？ここで言われていることはまさにそのことなのです。私の思いどおりではなくて、主よ、あなたのみこころがなりますように。私はそれに従っていきたくて。そうやって救いにあずかった我々はそのように生きていくということです。聖霊がちゃんとあなたを助けてくださる、導いてくださるのだから、その方に助けを求めながら歩んでいきなさいと。

ですからこの御霊によって生きるというのは、自分のしたいこと、そういったものは一切捨てて、聖霊の導きに従うことです。そしてこれこそが罪に打ち克つ勝利の生き方なのです。その後を見てください。「そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。」と。あえて新改訳聖書では「そうすれば」と訳されています。結果の話です。もしあなたがすべてを捨てて御霊の導きに自分を委ねて歩んでいくなれば何が起こるかということ、「欲望」を満足させるようなことは決してないと。ここで使われている「欲望」というのは、実は「願望」という意味があって、良い意味でも悪い意味でも使われます。間違いなく17節では悪い意味で使われています。「肉の願うこと」です。つまり神のみこころに逆らうことです。御霊が願うことは神のみこころに従って行くように、肉の願うことはその真逆であって、自分の思いどおりに生きていこうと。そうすると、この16節でパウロが言うのは、もしあなたがすべて委ねて御霊によって歩んでいるならば、御霊の助けをいただきながら生きているならば、何が起こるかということ、あなたは肉の欲望というもの、肉がかつての生き方にあなたを引っ張っていきうとする誘惑に対して、勝利することができるのです。おもしろいことばが使われています。「満足させるようなことは」ないと断言しています。「満足」ということばが使われています。これは「成し遂げる」とか「成就する」とか「実現する」という意味を持ったことばです。つまりパウロが言いたいことは、あなたは肉が願うことを成し遂げないとか、肉が願うことを達成しないということです。

まとめるとこういうことになります。残念ながら我々クリスチャンの中にも罪の性質があります。その古い罪の性質は、救われた私たちがかつてのように肉に従って、自分の快楽に従って、自分の欲望に従って生きていこうと、そのように働くのです。肉がこういう働きをあなたを通して成し遂げようとするのです。しかし、それを知ったあなたはそれを成し遂げさせないということです。パウロがここで言っているのは、もしあなたがすべてを委ねて御霊に従って歩んでいるならあなたの肉があなたを誘惑してかつての生き方に沿って生きて行くように、神に逆らうように生きていこうと誘惑する時に、あなた自身がそれに対して私はそれはやらないという選択をします。なぜかというと、聖霊によって歩んでいる人は、その人の心が神によって支配されているからです。その心を罪がいま一度支配しようと働き始めた時に、我々はそれに対してストップと言うのです。この何週間か我々はこの学びをしているわけですが、皆さん、そんなことを実践されていませんか？ご自身の信仰の歩みにあつて、特にこの数週

間、このみことばが何度も何度も教えられるわけであって、よくない思いが出てきた時に、自分がそれに対してどうするか——。私はそういう思いを持とうとはしないとすぐそこでストップをかけるのです。これは間違った思いだから私はそんな思いを持たないと、神様助けてくださいと。あなたが喜ばれる思いが私の心を支配するようにと。そして私たちのこの古い性質が、この罪が私たちを誘惑して我々をかつての生き方に引っ張って行こうとする時に、私たちはそれにストップをかけることができる。なぜかというと、我々は聖霊によって生きているからだ。その聖霊なる神様に助けを仰ぎながら生きているからだ。残念ながら完璧に生きることはできないのです。でもその葛藤の中で私たちは神が喜ばれることは一体何かを考えてそれを実践していこうとする。

この16節でパウロが我々に教えてくれたことは、肉は必ずあなたに働いて、罪の生活をかつてのよう歩むように誘惑します。でも御霊に従って歩んでいるなら、御霊に従いながら、御霊の導きに従ってあなたが生きているならば、御霊に助けを求めながら歩んでおられるのなら、必ずあなたの罪があなたの中で成し遂げようとする罪の願いをあなたは成し遂げさせないと。ストップをかけるのです。おもしろいのは、「決して」ということばと「ありません」ということばがあります。このように訳されているのはここに二つの否定語が並んでいるのです。パウロはこういう表現をよく使います。なぜこうしたかということ、絶対にあり得ないからです。つまり御霊とともに歩み続けていくなれば、罪が私たちを支配するということから私たちは絶対にみずからを守っていくことができると。悲しい現実是我々のうちに罪を犯したいという、そういう罪があるわけです。罪に自分からおびき寄せられて行く。パウロが言ったように、自分のやっていることがわからない、やりたいことをやっているのではなくて、やりたくないことをしていると。だから気をつけなさいと言うのです。だから常に私たちは御霊に導かれて生きることが必要だと、常に私たちはこの神の助けをいただかなければいけないと。

信仰者の皆さん、ぜひ覚えてください。私たちはこういう生き方を実践できる人に神は生まれ変わらせてくださったのです。鍵は私たち信仰者の力である聖霊に助けを求めながら、その力によって生きて行くことです。このことをわかっていても失敗の連続です。だとしたら我々はそれを悔い改めてまた歩み続けることです。誘惑する罪に自分を支配させることを許さないのです。神が私の心を支配し続けてくださることを願いながら、そのことを選択しながら生きていく。そうやって生きなさいと。そのことを主は私たちに教えてくださった。主の助けをいただきながらその教えを実践していきましょう。

《考えましょう》

1. キリスト者の生きる目的を教えてください。またそれはどうしてわかりますか？
2. その目的を果たすために、どうしてみことばに従って生きることが大切なのでしょう。その理由を挙げてください。
3. 「御霊」と「肉」の意味を説明してください。
4. 「御霊によって生きる」とはどのように生きることかを説明してください。